

# さがほのかの適正株間と基肥量

## 野菜・茶業研究所

「さがほのか」の年内及び2月まで、5月まで収量を向上させるため、施肥量と株間について検討したので紹介する。

### 【普及したい技術のポイント】

大分方式高設栽培における「さがほのか」の施肥量は、基肥2.1g/株及びマルチ前追肥0.7g/株、12月以降液肥による追肥を行うと年内及び2月まで収量が多くなる。

大分方式高設栽培における「さがほのか」の株間を20cmにすると、2月まで及び5月までの収量が多く、所得性が高い。

株当たり窒素施肥量は 基肥1.4g + マルチ肥1.4gと 基肥2.1g + マルチ肥0.7gの2水準、株間は 15cm、18cm、20cmの3水準とした。2006年9月21日に大分方式高設栽培で定植し、同年11月から2007年5月まで収穫調査を行った。12月以降は全区ともOKF-1の750倍液を5～10日おきに100ml/株施用した。

### 【施肥量及び株間と果房の連続性】

各果房の収穫開始は、株間20cmが最も早く、施肥量による影響はない(表1)。

表1 施肥量及び株間と収穫開始日(月/日)

基肥N量	マルチ肥N量	株間	頂果房	第2果房	第3果房
1.4g/株	1.4g/株	15cm	12/ 6	2/ 7	3/16
		18cm	12/ 6	2/ 4	3/ 8
		20cm	11/30	1/25	3/ 2
2.1g/株	0.7g/株	15cm	12/ 2	1/24	3/15
		18cm	12/ 2	2/ 2	3/ 8
		20cm	12/ 2	1/24	3/ 9

### 【株間及び施肥量と株当たり収穫果数】

各果房の収穫全果数は、第2果房で株間20cmが多く、第3果房以降には差がない。施肥量については、1.4g/株より2.1g/株の方が株当たり収穫果数が多くなる(表2)。

表2 施肥量及び株間との株当たり収穫全果数

基肥N量	マルチ肥N量	株間	頂果房	第2果房	第3果房以降	合計
1.4g/株	1.4g/株	15cm	9.7	14.4	31.1	55.1
		18cm	10.6	17.2	28.8	56.6
		20cm	10.5	20.5	28.2	59.1
		2.1g/株	0.7g/株	15cm	10.5	16.4
18cm	10.3	17.6		33.7	61.5	
20cm	10.3	24.7		34.0	68.9	

注) 頂果房は概ね10果に摘果

### 【株間及び施肥量と平均果重及びa当たり商品果収量】

2月までの平均果重には株間による差はないが、5月までの平均果重は、株間20cmが大きくなる。基肥施肥量による平均果重への影響はない。2月まで及び5月までの商品果収量について

は、株間による差がない。施肥量については、基肥N2.1g/株が1.4g/株より年内多収となり、2月まで及び5月までの収量とも施肥による差はない(表3)。

表3 施肥量及び株間と平均果重と商品果収量

	基肥N量	マルチ肥	株間	年内	2月まで	5月まで
平均果重(g)	1.4g/株	1.4g/株	15cm	27.6	18.6	14.1
	"	"	18cm	27.4	18.6	14.6
	"	"	20cm	23.7	18.5	14.8
	2.1g/株	0.7g/株	15cm	23.5	16.7	13.2
	"	"	18cm	24.3	18.3	13.8
	"	"	20cm	24.7	18.0	14.5
商品果収量(kg/a)	1.4g/株	1.4g/株	15cm	70	249	697
	"	"	18cm	56	243	617
	"	"	20cm	60	264	583
	2.1g/株	0.7g/株	15cm	91	279	679
	"	"	18cm	77	248	627
	"	"	20cm	76	302	661
分散分析結果	施肥法			*	N.S	N.S
	株間			N.S	N.S	N.S

注) 分散分析結果 \* : 1%水準で有意、N.S : 有意差なし

### 【経営試算】

a 当たり販売額は、1.4g/株で株間15cmと2.1g/株で株間15cm及び20cmが多いが、育苗にかかる経費、労働時間等を考慮すると、2.1g/株で株間20cmが最も所得性が高い(表4)

表4 施肥量及び株間と販売額

基肥N量	マルチ肥N量	株間	年内計	2月まで合計	5月まで合計
1.4g/株	1.4g/株	15cm	10	30	64
		18cm	8	29	58
		20cm	9	32	56
2.1g/株	0.7g/株	15cm	13	34	65
		18cm	11	30	60
		20cm	11	36	64

注) 単価はJAおおいた経済連共販の3年平均(2004～2006年)

### 【利用上の留意点】

1) 年内収量を高め、花芽分化を安定化させるため、7月末までに採苗し、8月下旬までに窒素中断する。